

『時代へ、世界へ、理想へ』

2020年07月20日

作家の高村薫氏が、『サンデー毎日』に連載した57編のエッセイをまとめて、『時代へ、世界へ、理想へ』と題して上梓している。日本と世界で起こっている出来事を、それらが起こる論理と背景を捉え、理性的に分析、批判している。高村氏は「はじめに」で、「特段の専門知識をもたない一物書きは、この身体を物差しにして時代を眺め、市井の言葉で自身の身近と社会のあれこれを捉えるのみである」、「私には一日本人として大真面目に同時代を生きているという自負がある。そういえば、令和のこの国で影をひそめてしまったものの一つは、より良く生きるという、人としての当たり前前の志ではないだろうか」と書き出している。高村氏は知性と批判力を持っておられるが、ただの人として、出来事を身体的に捉え、自分の考えを言葉と行動で表していくことが、大切なことではないかと思った。

私は、日本は「天皇制」によって民主主義が醸成できない土壌になっていると思っている。だから、人が「天皇制」を、どのように考えているかに関心を持つ。高村氏は『『天皇観』と『憲法観』 重なる世論の揺らぎ』で、下記のように書いている。「30年にわたる前天皇の慰霊と慰問の旅は、天皇とは何者かについての平成の記憶となり、象徴天皇制についてのぼんやりとした国民的合意をつくり上げた。それはまた、過去の戦争責任や、宮中祭祀の宗教性と憲法の整合性など、天皇制が抱える諸問題をそっと遠ざけてしまうことにもなり、私たち国民はひたすら思考停止に甘んじ続けた30年であった。」問うことを止めた「思考停止」の中で、憲法が変えたりされると、「自民党の憲法改正草案にあるように、象徴である天皇が同時に『元首』になったとき、私たちが見るのはいまとはまったく違う天皇制の風景になろう」と警告している。私は、天皇に人としての権利を認めた時、天皇神話から解放されると思っている。

高村氏は、国家財政の危機と経済の疲弊、文書を改竄・消去する政府の不誠実、AIがもたらす労働環境の変化、地球環境の危機的状況、高齢化と少子化が生む社会的な生き詰まり、オリンピック問題など、荒れ果てた現代日本の現実を多岐にわたって論じている。

それらの中で、最も共感を覚えたのは、「アカウントビリティー（説明責任）」という言葉である。国の在り方を左右する重大事が、納得できる説明もなく、政府の独断で決められている。野党の追及をかわすため、国会を開かない。不祥事で辞任した大臣たちも、釈明も謝罪もなく、辞職もしない。政治はもはや無法地帯となっていると批判した後、下記のように書いている。「そうして『説明責任』という言葉ばかりが踊るのだが、原意のアカウントビリティーは『説明する責任』のことではない。人が自身の権利を行使した結果について正当性を主張し、失敗すれば責任を取ることまでを含めたガバナンスの一つの概念であって、日本では政治家から企業人まで、誰もその正しい意味を理解していない。」日本では、社会的に地位のある人々は、自分の意のままに行い、その結果が間違った場合でも、責任を取らない。責任者が責任を取らない社会は人の心が荒廃していくのは明らかである。

私は、中国の香港への扱いに危機感を抱いている。中国の横暴には呆れ果てるが、このような権力支配がどの国でも起こってきている。高村氏は、街頭演説会で「安倍やめろ」と野次る者を警察が外に出す異様な光景が日常的に鎮座していると指摘している。日本の民主主義と自由も危うくなっているのではないかと。人は皆、生きることを喜べる社会であってほしいと願っている。高村氏は、起こっている諸々の出来事に危機感を持ち、「思考停止」に陥っていると繰り返して述べ、劣化している現実を見据えよと訴えている。